
AM0:17

立花 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AMO:17

【Zコード】

N4142P

【作者名】

立花 凜

【あらすじ】

ストーリーらしいものはございませんのであらすじを書くのも結構難しいのですが、要するに美術系女子のちょっとびり変わった日常を描いたものです。モニターからせめて10センチ程度は離れて御覧になることをお勧めします。

ジャンルは文学となつておりますが全然堅いものではありません。

九月二十一日午前零時十七分、私の住居であるワンルームのマンションのすぐ近くにある線路を貨物電車が通過した数秒後。私は手首を切った。

+

「手首を切った」と言えばあたかも腕の末端部を切断したかのように聞こえてしまつかも知れない、と言う可能性を考慮して敢えて表現を変えるならば、「リストカットした」と言う台詞が一番適当だろう。大してレベルが変わつていないような気もするが。

理由は、と問われれば迷わず「持病の中二病が…」と少女マンガに出てくるイケメン男子ぱりの爽やかさでもって答えよう。だが今現在、私の心の住処であり且つ身体の住処でもあるワンルームマンション、その名も「ムーンライト月見坂」の四階、その一番奥であるところの四〇五号室に於いて存在している二足歩行が可能で火が使用出来て言語を駆使することの出来る生物は私一人なのである。つまり、つまり。誰も理由を問うてはくれないので。ああ、一人暮らしの何と寂しきこと。誰か私のこの溢れんばかりの魅力、雌蛾の如く発散されるセクシュアルなフェロモンに気付くのだ、さすれば世界は救われるであろう！

などと下らない思考に脳細胞を消費している間に、溢れ出た赤い体液がフローリングの床を濡らし始めた。後で綺麗に拭かねばならぬ。面倒だ。頭を抱えようとして、左腕の先の方が血だらけであることに気づいて踏みとどまつた。流石に頭部血みどろは余りにもホラーだらう。しかし、この中途半端に持ち上げた私の腕はどうすればいいのだ。

そこで私は、この眞白で美しい手首に約五ミリメートル程の深さ

迄カッターナイフを食い込ませるに至った経緯を述べることにした。尚、手首についての描写、真白で美しいという表現には嘘が含まれているので注意して欲しい。何故なら私の手首は既に傷だらけであったからだ。

+

九月二十日、間も無く日付も変わらうかと言うような時間帯、私は通っている美術大学のサークルの友人たちと酒を飲み交わしていた。参考までに記しておくが、別に何か嫌なことがあってヤケ酒を飲んだわけではなく、ただいつものノリと勢いでアルコールを摂取していただけである。

深夜の公園は私たち五人以外には誰もいなくて、時間が止まっているかのように静かだった。電灯の白い光に照らされて、私は石で出来た小さな石碑の様なモノの上に座った。甘酸っぱく淫らな関係を日々構築中のケンジとユウカはベンチに並んで座り、熱く長い接吻を交わしていた。ショウコは私が座っている石碑にもたれ掛かるようにして座つていて、そしてリョウヘイは一人立つたまま照れくさそうに、ケンジとユウカの唇が、舌が、ディープなキッスを交わしている様を観察していた。

「照れるなら見んなよ」

とショウコが煙草に火を点けながら呟く。リョウヘイはさらに照れて、頬を赤くした。酷く眩しい電灯に照らされた紅潮したリョウヘイの顔は、オブラーートに包んで表現するならば、非常に気色が悪かつた。

「で、どうなのさ。」

ショウコがそう問いかながら、頭部を後方に傾けて私を見上げた。

「何が?」

と聞き返してみたものの、何を聞かれているのかは分かっていた。だが女には分かっていてもトボケなければならぬ時がある。申し訳

ない、自分でも言つてゐる意味がよく分からなくなつてきた。

「課題終わりそつ？」

課題、課題。そうだ、課題である。実はトルコ語でも同じように「カダイ」と発音する奇跡の単語、「課題」だ。と言つのは嘘であるが、その真偽には何の関係もなく、私にはやらねばならぬ課題があつた。それは、明日までに「私と街」と言つテーマで油絵を完成させねばならん、と言つほぼ完遂できる可能性がゼロパーセントに近い課題なのであつた。近いと言つかもう「割ほどマイナス側に振り切れている気がする。

「と言うことで無理。百パー無理。シヨウコやつてよ」

「仕方ないなあ、コーラ五リットル分でやつてやる。」

五リットルと言つことは一リットルのペットボトルを一本と、五百ミリリットルのペットボトルが一本で計算が合う筈。ああ、この出費は一人暮らしの学生には痛い、痛すぎる。けれど背に腹は代えられない。私は腸を引き裂くような思いで「お願ひ」と言つた。

「オッケー。明日買つてきてね。」

こうして私は大学の単位を一つ手に入れるのであつた。コーラ五リットルで手に入るのなら安いものさ。まあ買うわけ無いけど。そんなモノ買うくらいなら本屋で日曜を喫つて適当に掘んだ本を買つた方が数倍マシだつての。

その後もコンビニで買つてきたアルコール類を浴びるよつに摂取し、ついでに頭から浴びてびしょびしょになつた結果、私たちは酷く酔つ払つてしまつた。特にショウヘイなどは、地面に突つ伏して動けないでいて、非常に鑑賞向けのオブジェクトになつていった。あとサッカーのボールにも適していそう。

ショウヘイと一人で漫然とそのオブジェクトを眺めていると、不意に面白くなくなつて、私は「そろそろ帰る。」と言つた。ベンチに倒れ込んで情事を始めようとしている一人を横目で見ながら家路に着く。公園を出てから、「風邪引くなよ、あと逮捕されんなよ」と

注意し忘れていたことに気が付いたが、わざわざ戻つて、ペッティング等楽しんでいるであろうお二人の邪魔をするほど私は莫迦ではなかつた。

フラフラになりながら、「千鳥足ガールだぜうわははは」と呟きつつ街灯の下の薄暗い道路を歩く。そのうちに口が寂しくなつた私は、「ART - SCHOOL」というバンドの「sad marchine」という曲を口ずさむことにした。と言つのは激しく嘘で、私はその大好きな曲を、大声で歌つた。さつましーん、おーさつましーん。家に着いた。

鍵を開けて、転がりこむように部屋に飛び込む。そして、いつもの如く机の上に置いてある錠剤を口に含んで、水道水で流し込む。これでマイスリーとビールのチャンポン完成。あと数分もすれば多幸感に包まれて世界がディスコボールに照らされたかのように輝きだすだらう。

溜め息をかつてない程に深く吐いて壁にもたれ掛かつたら、遠くから電車の接近してくる音が響いてきた。目の前の低い机の上には、カツターナイフが見えた。私はカツターナイフを手首にそえた。電車がマンションの前を通過した。私は少しだけ躊躇した。そして切つた。

+

氾濫を始めた血液は一向に止まる気配が無かつたので、ガーゼでぐるぐる巻きにしたその上から包帯できゅるんきゅるん巻きにした。これで完璧である。ちょっと包帯にまで赤い色が染みてきている気もするけれど、気にしてたら口ツクじゃねえぜ。ああそう言えば元彼はジャズが好きだつたんだっけ。あんな知的を鼻に付けたような気持ち悪い似非インテリ野郎、初めから私が巧くやつていけるわけが無かつたんだ。夜枷だけは巧くやつたけれど。

アルコールによつて幾倍にも増強された睡眠薬の所為で私の脳内は「混沌」と書いて「カオス」と読む！と言つた状態になつた。思考は全く纏まつうとせずぐちゃぐちゃで、立ち上がりうとしてバランスが全く取れずに転んだ。腰を強かに打ちつけたが、今どこの彼氏はいないので腰を痛めたところで不都合はないのであつた。くわばらくわばら。そう言えば薬とか酒とか、性器にぶち込んだらすつごい効くつて聞いたことがある。今度やってみよう。

突然突如いきなりはたと急にやぶから棒に唐突に出し抜けにやにわに不意におもむろに突発的に私は外に出たくなつた。さてさつきの単語群の中で誤用されているのはどれでしよう。答えはウェブであ、でも良く考えれば外に出たくなつたのは別に唐突でも何でも無い。部屋の中には幻覚によつて生成された人間のような者共が跋扈してたし、何となく外の空気が非常に綺麗な気がしたのだ。実際のところこれほど都会に住んでいるのだから外に出たところで空気が綺麗だつたりはしないのだけれど。

扉を開けて部屋の外に出る。エレベータのドアには「故障中」と書かれた紙が貼られていたので、その横の階段を使って降りることにした。そう言えば鍵を閉めていないような気もするけれど、大したものは置いていないから別に取られても構わないさ。大切なものつて言つてもタンポンくらいだし。アレが無いと生理の時に大変だから。

一階に下りてオートロックのドアを開けるや否や、涼しい風が私のスカートをめくるべく夜道を駆けた。だが私のスカートは非常にロングなのであつた。

ふと目線を下げる、道路には卑猥な言葉と猥褻な写真が大きく印刷された、嫌にピンクピンクしたチラシが落ちている。私はそれに手を伸ばした。何故ならそのチラシでにっこり笑つてゐる下着姿の女が余りにも煽情的だつたからだ。けれど別に持つていても仕方ないので、数回折つて夜空に投げた。私の紙飛行機「コンコルド」

号」（今命名した）は、緩やかに空を飛んで行つて、電線に引っかって墜落した。まるで人生のようだつた。人生とは電線なり。いや間違えた。人生とは紙飛行機なり。何だかかっこいいじゃないか、と私は興奮して鼻息を荒くした。

紙飛行機、上等じやないか。

墜落した紙飛行機は、接触した電線によつて黒焦げの無様な姿にされていた。無様だなあ、私みたいなだなあ、と呴いたら、紙飛行機は「君が僕みたいなんだろう」と反論した。だがしかし、それはおかしい話だつた。紙飛行機はつい先ほどピンクチラシと言つ母によつて出産されたばかりの赤ん坊で、それに対する私は二十一歳。だつた気がする。とにかく私の方が早くこの世に生を受けたわけで、ならば紙飛行機が私に似たと言つ私の主張は絶対的な根拠を持つて証明されているのである。と言つかそれ以前に紙飛行機が反論する、というのがおかしいのであつた。いや、電線に衝突したところで焼け焦げるのか、と言うところからしてもう何か間違つてゐるな。まあ、夜だし。そんなことがあつても良いか。

私は真黒でひんやりしたアスファルトの上に寝転んだ。視界を縦横斜に区切る電線たち。夜空を痴漢犯のようなコソコソ具合でもつて移動していく雲。何故か私の顔に足を乗せて満足そうにしている野良猫。そうだこいつの名前はドラちゃんにしよう。三毛猫だけど。

夜空には、星が輝いていた。こんな都會では滅多に見ることの出来ない、満天の星空。今私の視神経は全力でその星々の情報を脳に送つてゐるんだろう。そこに思考が至つた私は、急に微笑ましい気持ちに包まれた。もう死んでもいいと思つた。或いはヤバい死ぬしかないと思つた。嘘かも知れない。両方嘘とか、どっちか嘘とか。どうだらう。どうでもいいや。

「世界はかくも素晴らしい！」
気がつけば思わず叫んでいた。

ほら、全てはこんなにも幸せに満ちている。全てが私たちのことを見守つてくれている。例えそれが睡眠薬の副作用によつてもたらされた幻覚だつたとしても、そんなこと関係ない。

だつて、今こんなにも幸せなんだから。

+

私は、心の住処であり且つ身体の住処でもあるワンルームマンション、その名も「ムーンライト月見坂」の四階、その一番奥であるところの四〇五号室、一人きりの部屋に戻ることにした。

いつまでもアスファルトと触れ合つていてもよかつたんだけれど、何となく公然猥褻で捕まりそうな気がして諦めた。どこが猥褻なのかは私にも分からぬ。存在自体が猥褻とかそんなことは無いと信じたい。

鍵の掛かっていない扉を開けて部屋の中を覗き込むと、机の上には血のついたカッターナイフが転がっていて、床には血液が水溜りを作つていた。世間一般の人々はきっとそれを血溜りと呼ぶのであつた。

私は溜め息をついて、ティッシュで血を拭つた。バイバイ血液くん。君は今からこのティッシュに染み込んだまま焼却場で火にかけられるんだよ。

血を拭い終えると、置きっぱなしだったカッターをペン立てに突つ込んだ。そしてきっとこのカッターナイフはこれからも活躍し続けるんだろうなあ、などと未来を予言してみた。それは、本当に素晴らしいことだつた。貴重な金属資源の有効活用である。紙を切るだけじゃあ、勿体無いじや無いか。

「ミニ箱の中から血液の染みたティッシュが「早く死んでしまえよ、これ以上生きていてもリストカットとオナニーでティッシュを浪費するだけだろう」と言った。私は嫌だと答えた。

「だつて、死んだら生きていられないじやないか。」

リストカットするような屑人間でも、この素晴らしい世界で生きていく権利を持っているのだから、生きるか死ぬかなんて私の自由だ。ああ素晴らしい、素晴らしい。日本国憲法の第何条だけ、忘れたけれどもとにかく生存権とやらに私は深く感謝した。

「グッバイ、夜。」

そして起きた時にはよろしく、朝。

私は笑いながら、気絶するかのように眠りに墮ちた。

(後書き)

登録したので挨拶がてらに数ヶ月前書いたものを投稿させていただきます。

某所で先に公開した時に冒頭が少しくどいと言つ感想をいただいたのですが、現在の実力では如何ともし難い感じでしたので、そのままの投稿となります。

これからちょいちょい投稿して行こうと思つのでどうぞよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4142p/>

AM0:17

2010年12月18日18時34分発行